

ぱびるす

第 26 号

香芝市真美ヶ丘
5-1-53

奈良県立
香芝高等学校

文化図書部

『友情』を読んで

校長 殿
村 孝 平

私が中学生の時、「友情」という言葉があった。いつ頃から友情という言葉が使われ出したのかを調べた。「友情」という言葉を歴史上で最初に用いた人物は、マルクス・トゥツリウス・キケロ（紀元前一〇六年〜紀元前四三年）という政治家、哲学者であったと「悲痛社」管理人の北畑淳也氏という。キケロが書いた『友情について』という本があるという事は、紀元前から友情という概念があったということになる。キケロはその著書の中で、「友情は数かぎりない大きい美点をもっているが、疑いもなく最大の美点は、良き希望で未来を照

らし、魂が力を失い挫けることのないようにする、ということだ。」と述べている。また、「友情というものは、人間に関わるものの中でも、万人が口をそろえてその有用性を認める唯一のものだ」とも述べている。有用性という言葉を用いると、友情というものが味気ないもののように感じられてしまうが、友情は、友達との関係性の中で「目的」や「結論」を必要としない性質をもっているといえる。また、「真の友情はどうすれば成立するか」についてキケロが、「自己を愛するように、相手

の友人は、第二の自己のようなもの」と考えているように、まさしく友情によって互いが唯一無二の存在になることと言える。

私は、この「友情」というキーワードから一冊の本を読むにいたった。『友情 平尾誠二と山中伸弥「最後の一年」』である。この本を読み、友情とは何かを改めて考えさせられた。山中伸弥氏は、ノーベル生理学・医学賞を受賞された、京都大学 iPS 細胞研究所所長であり、平尾誠二氏は、元伏見工業高校（現京都工学院高校）ラグビー部が全国制覇をした時の主将であり、その後、神戸製鋼ラグビー

部で日本選手権七連覇を成し遂げ、W杯日本代表監督を務め、神戸製鋼コベルコスティーラーズGM兼総監督として二〇一六年に五十三歳の若さで亡くなられた方である。山中伸弥氏は、平尾誠二氏に憧れて神戸大学で三年間ラグビーをされたこともあり、週刊誌の対談がきっかけで親友となった。ゴルフ等を通して友情を育む中で、山中氏は「研究チームを率いていくうえで、参考になる部分や共感できる部分は個々にたくさんありました」と述べている。二人の仕事の性質は全く違うが、互いに得るものや共通するものがあり、刺激し、尊敬し合うことで、互いを高め合っていたと私は感じた。

平尾誠二氏は、二〇一五年九月に肝内胆管癌が見つかったため、免疫療法、新薬による治療、抗癌剤と治療を行ったが、一年後の十月に亡くなられた。ノーベル賞を受賞された山中氏の心中は、容易に知ることができるようには思わなかったが、親友として医師として病気を治すことができなかつたことの悔しさは、周囲

の者には計り知れないものが、きつとあるだろう。山中氏と平尾氏が出会ったのは、四十六歳の頃。それからわずか六年の付き合いでしかなかったが、友情を育み、互いに信頼し合う関係になった。両氏の友情は、まさしく冒頭で述べた友情の定義に当たるものだったのでないだろうか。

友情という言葉からは、青春時代、若者を想像するが、何歳になっても友情を育てることができると知ることができた本だった。そして、友情以外にも、倫理観、切り替える力、プレゼンテーション力、理不尽、チームワークといったことも書かれていたので、自分の取り組み方を点検できる一冊でもあった。



卒業生に贈る

1)の1冊

学年主任 出井良明先生

『道は開ける』 (テール・カーネギー著)

以前に勤めていた学校の同僚の先生に勧められた本。誰しも人生の中で、辛いことや困難なことに直面する。心が折れそうになる時がある。そのような時に役に立つ本であると思う。「心の中から悩みを追い出すには」「避けられない運命には調子を合わせる」などの内容である。自分の心の持ちようや習慣を改め、心を闇から救いだし、新しい人生を切り開くための方法が述べられている。まさに「道は開ける」。

☆☆☆ 三年一組 酒本美奈子先生 『どんぐりと山猫』 (宮沢賢治著)

面倒だという裁判を手伝ってくれと山猫から頼まれた一郎くんは、言い争うどんぐり達をすっかり黙らせる知恵者で、山猫にはお世辞や優しい嘘で素晴らしい気遣いができる、スーパリー使える男の子です。子供には金のどんぐりが、大人には普通のどんぐりになってしまいうのか。宮沢賢治の、小さいものや自然への優しいまなざしにある

ふれた、ちりばめられたオノマトベも楽しい童話です。

☆☆☆ 三年一組 西川雅則先生 『自分道 自分をつらぬき歴史を作った女たち』 (玉岡かおる著)

今年の5月には元号が新しくなり、時代は移りゆく、AIやIoTが社会を動かす、目に見えて変わっていくこの現代においても、自分が自分であることは続いていく。時代の変動とつきあいながらも、自分道を貫いた先人たちの生きざまが語られている。自分道とは、自分が何であるか、どんな力を有し、どのくらいに力に耐えうる器であるかを探し、知り、自分であることをそのまま出し切り、できることを尽くし重ねて、日々邁進することをいう。

☆☆☆ 三年二組 本田住子先生 『流れる星は生きている』 (藤原てい著)

終戦後、満州から日本に引き揚げるまでの著者の体験記。夫と離れ、一人で乳飲み子を含む幼な子を連れての引き揚げは「壮絶」としか言いようがない。小説ではなく、実体験だからこそ、当時の苦勞がより実感でき

著者の夫は、後に山岳小説家として名を成す新田次郎。そして子の一人は後の数学者、藤原正彦。命が繋がることで、前方に光が見え、道は広がる。この書を読み、命の繋がりと平和の尊さを感じてほしい。

☆☆☆ 三年二組 坂東昭栄先生 『進化する強さ』 (クルム伊達公子著)

四十三歳という年齢で世界のトッププレーヤーと渡り合える彼女の強さはどこにあるのか? 「明日は変えることができる」という彼女は、楽しむことで人生を切り開いて来た。誰でも挑戦することで進化できる、元気をくれる本です。

☆☆☆ 三年三組 太田小百合先生 『生きるほくろ』 (原田マハ著)

いじめからひきこもりになった主人公は母と二人暮らし。面倒を見てくれていた母がアパルトを去った。唯一残されたのは年賀状の束。年賀状を頼りに疎遠になっていた父方の祖母に会いに行く。彼は人との繋がりの中で生きる力を得て、自分の道を踏み出す。人間関係や理不尽な出来事の中で私達は生きづらさを感じる。しかし、生きる希

望を与えてくれるのも周囲の人である。みなさんの人生に良い出会いの多いことを願って、この本を薦めます。

☆☆☆ 三年三組 長谷川僚太郎先生 『熱気球イカロス5号』 (梅棹エリオ著)

一九六九年、日本で初めて熱気球を飛ばした京都の高校生の記録。設計図はない。仕組みすらわからない。仲間を集め、企業を回ってスポンサーを募り、パソコンも電卓もない時代、「計算尺」で何度も計算し、家庭用ミシンで気球を縫う。そしてついに初飛行。

☆☆☆ 三年四組 荒平正二先生 『おれは鉄平』 (ちばてつや著)

私は小学五年の夏から剣道を始めた。中学二年でこの本に出会い剣道観が変わった。主人公鉄平になりきった。高校、大学と、鉄平流(荒平流)で全国的に有名な剣士になれた。大学二年の秋のこと、『六三

四の剣』の著者、村上もとか氏に、この本のアドバイザーをたのまれ協力した。私の人生を変えた二冊の本です。ぜひ読んでください。

☆☆☆ 三年四組 森本博之先生 『隠された十字架 法隆寺論』 (梅原猛著)

先日他界した梅原猛の代表的著作である。法隆寺は、その機能・構造からして怨霊封じの装置として再建されたと考えられ、従ってここに祀られる聖徳太子とは、正に怨霊に他ならぬ。これが著作の要旨である。この本が日本中に与えた衝撃は計り知れない。それ故反論や批判も多いが、定説や歴史の常識といった先入観の虜となっていない可能性を、またそうした鎖から自らを解き放つべきことを、思い知らせてくれる一冊である。

☆☆☆ 三年五組 小村美幸先生 『道をひらく』 (松下幸之助著)

みなさんは、バナソニックの創業者である松下幸之助さんという方を知っていますか。発刊されて半世紀経っても、前向きで思いやりにあふれた松下さんからの言葉は私達を励ましてく

卒業生に贈る 二冊

れます。どんな時でも、謙虚でいることや素直でいることの大切さを教えてください。この本の「転んでも」という一篇の中に「失敗することを恐れるよりも真剣でないことを恐れた方がいい」という一文が好きです。人生は一度きり。だからこそ、日々真摯に真剣に生きていきたい、と思わせてくれる一冊です。

☆☆☆ 三年六組 大川貴余恵先生 『道は開ける』 (テール・カーネギー著)

この本は具体例を紹介しながら、偉人や一般人が悩みはどう向き合っていたかを紹介しています。それをまとめると、人に何かをしてもらうのではなく、人に尽くして喜びを得る。昨日や明日のことを思い煩うのではなく、今日を精一杯生きて充実感を得ることなど、前向きな姿勢で人生を切り開くことの大切さをわかりやすく語っています。これから新しい未来を切り開くみなさんに是非読んでほしいと思います。

☆☆☆ 三年六組 山本武史先生 『いつもだれかが...』 (ユッタ・パウアー著)

ドイツの絵本で、読みやすく

描かれています。絵が印象的で奥の深い内容です。おじいさんが孫にこれまでの人生について語りかけます。子どもは大きくなるといつか、大人になって助けがほしいようになります。助けがほしいとき、大人になってナチスや戦争というどうすることもできない時代の中、自分を見守ってくれる天使。いつも誰かに支えられているという見えな

☆☆☆ 三年七組 上西誠也先生 『愛するということ』 (エーリッヒ・フロム著)

生きるために、直接的に必要な不可欠な食糧のことや働くことについては、多くのことを学んできた。しかし「愛がない」人、生というものは考えられない。かかわらず、愛するということについては、どれだけのことを知っているのだろうか。著者は述べる。「愛は技術であり、能動的な活動である。それゆえ、学び、習練しなければならぬ」と。

六十年の時を経ながら、いままなお、様々な人間関係に疲れたときのひとつの処方箋ともなる。うる名著である。

☆☆☆ 三年七組 豊田有里先生 『人生で大切なたったひとつのこと』 (ジヨージ・ソーンダース著)

この本はシラキユース大学教授であるソーンダースが、卒業式で行ったスピーチを綴ったものです。彼は「人生で大切なたったひとつのこと」として、「やさしいひとになる」ことだと述べています。今、皆さんには何らかの目標があることでしよう。しかし、それが達成できるかは予測不可能です。達成しても次々と目標が生まれ、永遠に尽きません。目標や野心を大切にすると同時に、何をすべきか、なぜ彼が「やさしいひとになる」と言ったのかを考えさせられる一冊です。

☆☆☆ 三年八組 川下優一先生 『算数パズル「出しっこ問題」傑作選』 (仲田紀夫著)

「1、1、9、9の四つの数字を使って、四則計算で十を作れ。数字を使う順番は問わない。」小学生の頃にこの問題と出会いました。私が数学を好きになり、教員となるきっかけとなった本です。「数学の問題が解けたときの喜びを共有したい。」この思いは今も昔も変わ

りません。この本はブルーバックスシリーズの本で、自然科学全般の話題を親しみやすく取り扱っています。ブルーバックスの本から興味のある本を探してみてはいかがでしょうか。

☆☆☆ 三年八組 森野修三先生 『私とは何か「個人」から「分人」へ』 (平野啓一郎著)

クラスの中の自分、部活での自分、友達といるとき自分の、家族の中の自分、好きな人といるとき自分の、一人であるとき自分の。いったい本当の自分はどの自分なのか。真実の「私」というものは存在するのか。この難しい問いに、哲学者ではなく小説家の筆者がわかりやすく明快なひとつの答えを出します。人間関係に悩んでいる人、自分自身がわからなくなっているという人は、この本を読めば少し楽に生きることができるとも

☆☆☆ 学年係 平田淳次先生 『ぼくがぼくであること』 (山中恒著)

兄弟の中で一番優れているはずの名前なのに、成績はぱっとしないし、毎日叱られてばかりの平田秀一少年。偶然通りがかったトラックに飛び乗り家出

を決行。トラックひき逃げ?見つかるとやばい!とばかり山中へ。見知らぬ土地で、老人と少女が暮らす訳あり住まいに居候。次から次へと事件勃発。果たしては実家が火事!一生分の「まさか」が起こる夏休み。

☆☆☆ 学年係 大森優理先生 『チーズはどこへ消えた?』 (スベンサー・ジョンソン著)

二匹のネズミと二人の小人が「チーズ」を求めて右往左往する物語。ここでの「チーズ」は私達が人生で求める様々なものの象徴である。ある日、手に入れた「チーズ」が消えてしまう。その「チーズ」にいつまでも執着し消えた事を嘆くのか、すぐさま新しい「チーズ」を求めて行動を起こすのか、彼らの四者四様の行動を通して、変化を予期しすばやく適応する事、変化を恐れず変化とともに前進する事の大切さを気づかせてくれる。



図書館文化講座報告

第二回 本とお菓子

第一回……「詩のパズルの会」(H30・6・22 E3教室)
 第二回……「本とお菓子」(H30・11・20 調理室)
 図書館文化講座は、「本を身近に！」を土台にして、年二回開催しています。今年の図書館文化講座は、「食」をテーマにして開催しました。

第一回

詩のパズルの会

長田弘氏の『食卓一期一会』という本は、料理や食事をテーマにした詩集です。先人の知恵や丁寧な動作が必要な料理は、考えること、言葉にすること、生きること——それらと共通することだと、長田氏は詩を通して語りかけています。今回は、その詩集に収録されている『梅干しのつくりかた』をピックアップし、詩に触れるパズルゲームを行いました。

十五枚のカードに分けた詩を、四〜六人のチームで制限時間内に正しく並べ替えるというゲームです。梅干しの作り方を知っていれば、少し考えれば並べ替えることができ



る詩ですが、知らないとなかなか正解にたどり着けません。難しいながらもチームで意見を交わして考える姿がうかがえ、賑やかな声もありました。制限時間の間に、三年生の男子チームが正解を見事に導き出し、答えを黒板で発表してくれました。終わりに、梅干しの作り方の解説や詩の朗読があり、長田氏の「食」の世界に触れることができましたのではないのでしょうか。

「小説の中に出てくる料理やお菓子を実際に作ってみたら楽しそう」という一人の図書委員のアイデアで始まった、第二回目の文化講座。メニューは、蔵書にある『あん(ドリアン助川著)』と『かまどの嫁』(紫はなな著)に登場する、「どら焼き」です。どちらの本も、お菓子を通過して登場人物たちが心を通わせていくのですが、設定や世界観は全く違います。また、同じどら焼きでも著者によって表現が違うので、いろんなどら焼きを想像して楽しむことができます。

当日の文化講座では、この二作品の他、図書室で借りられる料理やお菓子をテーマにした本を紹介しました。その後、参加者十九名が四グループに分かれ、調理を開始。最初は静かだったグループも、調理をしていく中で会話が生まれ、だんだんと賑やかな声で調理室がいっぱいになりました。焼き上がった生地にあんこやクリーム、チョコなど、

好みに挟んで完成です。楽しそうな様子がかがえ、小説と同じようにお菓子を通して交流ができたのではないかと思います。

後日談ですが、数名の参加者が文化講座で紹介した本に興味を持ってくれたようで、借りていきました。少なからずですが、新しい本への入り口になったようです。

(協力…三年一組 馬出瑞穂さん・二年三組 田中愛莉さん・久保明子先生)



編集後記

本は「探す」ものではなく「出会う」ものかもしれない。たまたま読む本がなくて一冊

用意をしようと思って探しているときにはなかなかおもしろいものが見つからず、本屋さんでただ時間を潰しただけに終わることも多い。ところが何気なく新聞の本コーナーを読んでいて気になる本を見つけたら、ひよんなことから知人との雑談で妙に気になる本の存在を知ったりもする。この「ひよんなこと」から……の語源になっている「ひよん」。実は我が家の庭にそびえ立っている「ひよんの木」が語源になっている説がある。準絶滅危種になっており、学名「イヌノキ」。その葉には小さな虫が作ったコブができる。秋になると虫が穴を開けてそのコブから飛び出す。その空洞になった葉のコブに口を当てて吹くと「ひよんひよん」と音が鳴ることから「ひよんの木」と呼ぶようになったらしい。虫が作った奇妙な木の实から「ひよんな」という言葉が生まれたという説だ。

本との偶発然の出会いは人間同士の思いがけない出会いもなんとなく似ている。ひよんなことからおもしろい本や素晴らしい人との出会いがたくさんあるといいな、とささやかな下心を抱きつつ、庭の「ひよんの木」に今日も水やりをする私である。(高津)